

繋ぎの神

繋ぎの神とは、私が勝手に名付けたいる古層の神のことであるが、我が国の地蔵菩薩のと深く関係している。この際定義をはっきりさせておこう。

豊穰や誕生というものは、天の神と地の神とが合体して生み出されるものである。したがって、縄文時代の人々は、天の神が降りてくる柱とそれを受け入れる地の神をともに祀って豊穰や誕生を祈った。天の神は父なる天の神のことであり、地の神は母なる大地の神のことであるが、父なる天の神が降りてくる柱は石棒で、父なる天の神を受け入れる母なる地の神は炉で象徴された。縄文人は住居の中にこの石棒と炉をしつらえて、豊穰や誕生を祈った。

その後、陰陽石や双体道祖神を祈ったりするが、それらは縄文時代における石棒と炉をしつらえて祈りの変形である。また、三峰神社では今でも「ごもっともさま」という神事が行われているが、それも縄文時代における石棒と炉をしつらえて祈りの変形である。

さらには、母なる大地の神の象徴として胞衣を祈ったり、父なる天の神の象徴として、男性のシンボルや丸石道祖神を祈ったりするが、それらも縄文時代の祈りの変形である。

以上の祈りを、私は、繋ぎの神に対する祈りと言っている。つまり、繋ぎの神に対する祈りは、縄文時代の祈りまたはその変形を含めた豊穰や誕生に対する祈りである。

したがって、繋ぎの神とは、縄文時代の祈りまたはその変形に見られる神のことである。

以上のことは、次のページで詳しく説明したので、それをよくご覧いただきたい。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/yaseinokami.pdf>